調律師がご案内するピアノと音楽のとっておきの世界

音の扉

2018.11
創刊号

巻頭寄稿
「猫でも出せる」は褒め言葉？
ピアニスト **仲道 郁代**

特別寄稿
少子化の時代、次世代に向けてのピアノ教育戦略
一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）
専務理事 **福田 成康**

一般社団法人 日本ピアノ調律師協会　Japan Piano Technicians Association

「音の扉」創刊号　目次

4 「音の扉」創刊のご挨拶
一般社団法人日本ピアノ調律師協会会長　齊田 健

巻頭寄稿
6 「猫でも出せる」は褒め言葉？
ピアニスト　仲道 郁代

特別寄稿
10 少子化の時代、次世代に向けてのピアノ教育戦略
一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）専務理事　福田 成康

レポート
15 第10回 浜松国際ピアノコンクールを前に
（公財）浜松市文化振興財団を訪問
日本ピアノ調律師協会参与／中部支部　伊東 基貴

音楽&ピアノエッセイ
19 音の良い悪いがわかる人 …… 吉川 武文
21 自然音、生活音、楽音 …… 松本 憲治
24 ドイツ音事情 …… 矢作 クノップフ 有香

調律師の現場より
27 スタインウェイ B 型オーバーホール …… 広瀬 忠宏
29 おと　オト　音　調律師の仕事を紹介する「12 歳のハローワーク」 …… 鶴田 義幸
32 調律師人生 40 年のつれづれ …… 御堂 公治
35 バックステージから　～回想「羊と鋼の森」の世界～ …… 松岡 博明
41 浜松から世界へ …… 中田 吉彦

44 2019 年 IAPBT 浜松大会
Piano Piano Piano 参加者募集

表紙の絵について

唄うことは世界の共通言葉として人類の宝といえよう。その音声をリードするピアノには他の楽器に群を抜いた働きを感じる。ピアノ伴奏者は主役ではないが、その役割は大きく、歌を引き立たせる大きな黒子。その黒子は、演台では視聴者には顔を見せないのが常識なので、この絵には後姿で表現してみた。また、その裏には、姿が見えない重要な作業者である調律師がある。

十二所 秀正（日本ピアノ調律師協会会員／関東支部）

ご挨拶

一般社団法人 日本ピアノ調律師協会　会長

齊田　健

この度は一般社団法人日本ピアノ調律師協会誌「音の扉」創刊号をご覧いただき、有難うございます。

当協会は、昭和48年に社団法人として設立し、平成24年に一般社団法人へ移行しました。ピアノ調律に関する技術の向上及び研究の促進につとめるとともに、ピアノの適切な管理保全についての啓蒙を行い、わが国の音楽文化の進展に寄与することを目的としています。

ピアノの調律は協会員にお任せいただけるように会員の技術研鑽による更なる技術向上を進め、社会に向かっては、アコースティックピアノの魅力、調律の必要性を訴求するために、「ピアノ調律の日記念事業」であるコンサート企画を永く実施しています。

また、小学校高学年のお子様に対して、
初めて実施してから8年目になる「12歳のハローワーク」と
称した事業を継続展開中です。
ピアノへの想いの小さな芽が伸びることを
期待したいと思っています。

今年から来年にかけ、ピアノ調律業界に関する
様々なイベントが実施されます。
それは、当協会の技術指導サポートによりピアノ調律師の成長を
描いた映画「羊と鋼の森」のロードショーを皮切りに、
浙江省でのＡＰＴＡ（アジアピアノ調律師協会）中国大会参加、
東京ビッグサイトでの楽器フェアの参画、
２０１９年ＩＡＰＢＴ（国際ピアノ製造技師調律師協会）
浜松大会主催と続きます。

今般、当協会誌「音の扉」創刊号発行に当たり、
ピアノにまつわる情報を掲載しておりますので、皆様方に
その扉を開いていただきたく存じます。
皆様方の心に響き、それがピアノへのつながりと広がりを
創っていくことができれば幸いです。

「音の扉」が、皆様にとって素敵な情報の共有となりますことを
祈念しましてご挨拶とさせていただきます。
有難うございました。

「猫でも出せる」は褒め言葉？

ピアニスト

仲道郁代

Photo/Kiyotaka Saito

Ikuyo Nakamichi Profile

第 51 回日本音楽コンクール第 1 位、ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位、エリザベート王妃国際音楽コンクール入賞。これまでに国内外のオーケストラと共演を重ねている他、全国フォーラム「音楽がヒラク未来」芸術監督など、音楽と社会を結ぶ活動も行っている。メディアへの出演も多く、音楽の素晴らしさを広く深く伝える姿勢は多くの共感を集めている。CD 録音では「ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全集」（レコード・アカデミー賞）他、古楽器での録音など高い評価を得ている。最新盤は「シューマン：ファンタジー」。　2018 年度からは、春秋と 10 年間の新しいリサイタルシリーズをスタート。（一財）地域創造理事、桐朋学園大学教授、大阪音楽大学特任教授。

仲道郁代オフィシャル・ホームページ
http://www.ikuyo-nakamichi.com

ピアノは素晴らしく良くできた楽器です。何といっても、猫でも音を出すことができます。猫に音が出せる音程のある楽器は他にあるだろうか、と考えて、そう、マリンバがありました。でもマリンバの上を猫が歩いても、あの抜き足差し足の歩みでは、ちゃんとした音は出せません。しかしピアノなら、ちゃんとした音が出せます。

そんな素晴らしい機構を持つピアノは、私たちピアニストにとっては、表現したい心持ちととても遠い楽器でもあります。だって、心を込めなくても、表現に心をくだかなくても、簡単に音が出ちゃうのですから。

心と音の間に立ちはだかる障害

ピアノという楽器には、鍵盤から発音体までの間に、様々な“機械的障害物”があるのです。歌い手なら、まさに身体が楽器。心と身体の在り方をシンクロさせて表現することができます。管楽器奏者も、自分の息をそのまま音にすることができますし、弦楽器奏者は左手の指の震えや圧力をそのまま弦に伝え、右手の弓は腕の動きをそのまま弦に伝えることができます。

なんとも羨ましいことです。ピアノは何も考えなくても音を出すことができるのに、意識して表現を試みようとすると途端に、自分の心と身体、そして音を出す部分とが遠く離れてしまうのです。心と音の間には、極めて機械的な作業が、立ちはだかっているのです。

多彩な音のパレット

子供のころ、レッスンで先生に「この部分のタッチは、糊のように！」と言われて、「糊でくっついたような音って、どうやって出すんだろう？」と思ったことがあります。イメージとしてはわかるし、そんな音を出したい。けれど、ピアノという楽器は押すだけでいとも簡単に音が出てしまうのに、どうやったら「糊のように」なるのか。ムズカシイ問題です。もうこれは気持ちの問題だ！　その気になりさえすればいい！　と思ったこともありました。でも、ピアニストとして表現の可能性を追求し、ピアノという楽器で芸術を極めるならば、気持ちの問題などとおおざっぱに済ませるわけにはいきません。なんとか、私が鍵盤に触れる行為と、ハンマーが弦をたたく、その間に、あたかもなんら機械的な働きなどないかのように、音をコントロールしなくてはなりません。そのコントロールが叶った時、その時初めて糊のような音も出すことができるのです。のみならず、さまざまな形容詞でーかっちりした、ひんやりした、熱いマグマのような、夢のなかのような、重く暗い、明るく天に上がるような、などと――語られる音や、ふわふわ、ごつごつ、ツンツンなど擬音語・擬態語で表現される音など、音色のパレットを広げていくことができます。

ホロヴィッツのたった2音の衝撃

私は中学生の時に、アメリカでウラディミール・ホロヴィッツ

の演奏会を聴きに行くことができました。非常に熱狂的だったその日のコンサート。その、アンコール。そこで奏でられた、二つの音から始まる曲。ドとファの音で始まる、シューマンの「トロイメライ」。その、ドとファというたった二つの音を聴いた瞬間、涙がはらはらとこぼれ落ちたのでした。

ピアノの音は、たった二つの音、いえ、たった一音で、こんなにも人の心を揺さぶることができるのだ……。衝撃的な体験でした。その時の涙は哀しみのためでも辛さのためでも怒りのためでもない。ただただ、その二つの音の美しさに、どうしようもなく泣けたのです。なんと美しいのだろうか。こんな音がこの世に存在するのか。ピアノの音の可能性の大きさに、心を奪われました。

中学生の私が感じたその美しさは、いったい何だったのでしょうか。それは、猫が踏んでも出すことのできるように整えられた楽器の音の美しさとは、違うのだと思います。人の心が映し出された音。複雑な心のありよう、人生、それら全てが凝縮された音。そんな音だからこそ、心を揺さぶり、涙をあふれさせたのだと思います。

均一な調整のその先へ

こんなお話をしますと、調律師の皆さまは途方にくれるかもしれませんね。なにしろ、機械としてのピアノという楽器をきちんと整えるということが、最も大切なことなのですから。どの鍵盤も均一に、たとえ猫が踏んでも良い音が鳴るくらいに、丁寧に調整するということ、そのくらいに精度高く整えるということは、大変な作業です。

けれども、もしも均一に調整するというだけでしたら、電子楽器で十分ということになるかもしれません。むしろ電子楽器のほうが天然の材質による揺らぎのない分、実現可能性は高いでしょう。では、芸術としてのピアノの音とは何なのでしょうか。何が求められるのでしょうか。ピアニストの表現欲求は、均一な調整の、その先にあります。

タッチする鍵盤から音が出る部分、その音が離れる部分、そして響板の振動。これらの各プロセスで自在な反応が可能になるということを、求めているのです。均一性というのは、自在な反応を実現するためのファクターの一つではあります。しかし最終ゴールではないということなのです。……なんだか、理屈っぽくなってしまいました。

ピアノと語り、調律師と語る

ピアニストは常にピアノと対話しています。各地で演奏させていただいておりますと、使用頻度、年数、保管状況の異なるピアノたちと対話することになります。それは面白くもあり楽しくもあり、時に、難しくもあります。もっとこんな反応をしてくれたら、と思うこともあります。逆に、自分でも気がついていなかった新たな音の可能性を、ピアノが教えてくれることもあります。そのピアノとの対話を支えてくださるのが、調律師なのだと思います。

私の場合、お世話になっている調律師の方とは、毎回公演後すぐにピアノについてフィードバックをします。こと細かに、感想をお伝えします。調律師の方からは、楽器本体の状態について細かく伺います。その会話は、楽しいものです。メカニックがどのように音に変換されるのか、イメージをつかむこともできますし、次回はこんな可能性にむかえるのではないかと、期待も膨らみます。

以前ある調律師の方から、あるフランスの名ピアニストが、ソフトペダルの調整に細かいという話を聞きました。音色は左ペダルでつくれるからと。目から鱗でした。左ペダルで音色をつくるというのは初耳でした。また別の調律師の方からは、ある大ピアニストは、ピアニッシモでハンマーが弦を打弦する最後の瞬間の弦溝と弦との関係の調整に細かい、という話を聞いた時も、目から鱗の瞬間でした。ピアニッシモをつくるタッチの秘密の一つがそこにはあります。

音楽の可能性に向かって共に切磋琢磨

私たちピアニストは、楽譜に書かれた音を、実際の音として立ち上がらせる作業をしています。楽譜に書かれた音は、単なる物理的な音ではありません。一つ一つに意味があるのです。その意味付けをどのようにしていくのかが、ピアニストに求められていることなのです。

例えば、ベートーヴェン。ベートーヴェンの作品は、モチーフという非常に小さな単位の音の連なり――ある時は、たった二つやたった三つの音の連なり――を様々に組み合わせて展開してつくられています。そのたった二つの音からなるモチーフは、出てくるたびに異なる意味を持ちます。その意味を音にしていく作業がベートーヴェンを弾くということです。ベートーヴェンの世界で求められる音、それは意志を伴う音です。たった二つの同じ音を、異なる意味をもたらす音として奏でること。それをピアノという楽器で試みるのは、並大抵のことではありません。実現するために、ピアニストは、当然のことながら猫には出せない様々な音を追求し続けなければなりません。それは簡単な道のりではありませんが、喜びとともに歩む道でもあります。

その道のりを、調律師の方たちと共に、音楽の可能性にむかってご一緒することができる、切磋琢磨することができることに、深く感謝いたしております

少子化の時代、次世代に向けてのピアノ教育戦略

一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）
専務理事　福田 成康

1. 少子化の一方で伸びている会員数

現在、我が国では少子化が進んでいます。少子化に伴ってピアノを学ぶ子どもの数も減ると思われるかもしれませんが、私たちピティナの会員数、コンクールなどの参加者数は、左上の図のように伸び続けています。ピアノ指導者の団体は世界各地にありますが、当協会が発展できたのは、楽器メーカーと楽器店関係者の皆様のご協力によるところが多いと感謝しています。

ピアノコンクールは、当協会が創設した1970年代には、特別な生徒さんだけが参加するものでしたが、定期試験を受けるかのごとく定着することで、参加者数が伸びてきました。コンクールはピアノ学習者によるグランドピアノの需要につながりますので、当協会の支部の事務局を楽器店担当者様に担っていただけるという協力関係が成り立ってきました。

ピティナ（PTNA）
一般社団法人全日本ピアノ指導者協会
（英語名 The Piano Teachers' National Association of Japan）

1966年に発足したピアノを中心とする音楽指導者の団体。ピアノ指導者をはじめ、ピアノ学習者や音楽愛好者など約15,000人の会員が所属。全国約500か所に拠点を持ち、さまざまなイベントやサービスを展開。指導者の資質向上を目指すとともに、音楽教育を通じ広く社会に貢献している。

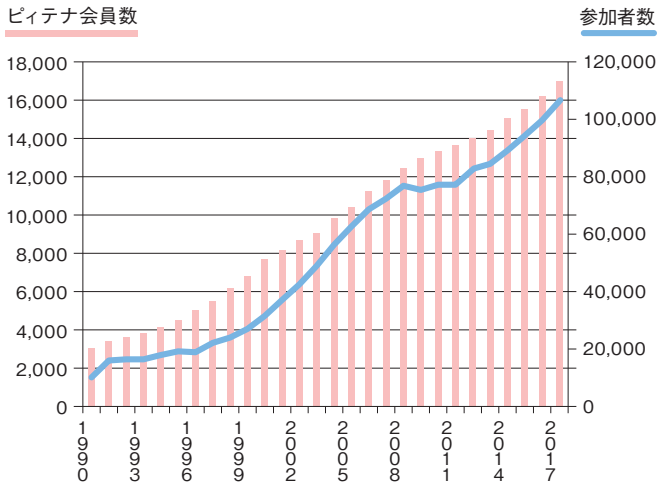
2.ピアノ教育に有利な環境の変化

「ケイコとマナブ.net」によると、習い事が多様化する中でピアノ教育は3位を維持しています。男の子のピアノ学習率が上がっていることと、脳科学的な証明や、東大生のピアノ学習経験率が50%を超えていることが明らかになることで、「情操教育」に加え「能力開発」が期待されてきているからと思われます。

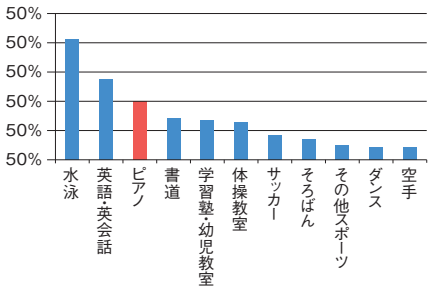
また、大学入試においてAO入試で入学する学生の比率が年々増加し、高校入試においても学外活動を内申書に盛り込むケースが増えてきているように思います。今後は、受験のためにピアノをあきらめる時代ではなく、ピアノ学習の成果がAO入試に活用される可能性が高くなります。

2019年10月からの消費税増税見込みやオンラインフリーマーケットの活性化により、ピアノの個人間取引が広がることも想定され、ピアノ教育業界においては大きなチャンスとなります。

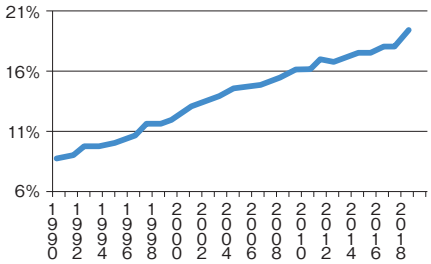
ピティナ会員数及びコンクール等参加者数の推移



子どもの習い事ランキング



ピティナ参加者　男子比率



3.少子化はピアノ継続年数でカバー

ピアノ教育業界だけの力で少子化による学習開始者数の減少を止めることはできませんが、ピアノ学習の継続年数を伸ばすことで全体の生徒数を維持することは可能です。ピアノ学習者

一人ひとりの学習継続年数を伸ばすための取り組みは、指導者の指導力・資質向上に加えて、次のように考えています。

〈1〉プロのアドバイスが受けられるステージ「ピティナ・ピアノステップ」のさらなる普及

ピアノの練習が好きな子はめったにいません。本番があるから練習ができますし、成長実感があるから練習するのだと思います。

ピティナで実施している「ピティナ・ピアノステップ」は、プロのアドバイスを受けられる参加自由の公開ステージで、ピアノ学習の継続に効果的です。参加者人数は、我が国のピアノ学習者全体の5％程度、年間5万人ですから、これを普及させることで日本全体のピアノ学習者の学習継続年数を伸ばすことができると考えています。

〈2〉受験でピアノが有利になる！中学・高校・大学入試でのピアノ歴活用の促進

近年、学校の入試でピアノ歴が活用できるケースが増えてきています。

たとえば、立教池袋中学では、従来の4科目の筆記試験枠に加え、国語・算数＋自分の得意なことという枠が創設されています。ピアノだけが優遇されているわけではありませんが、受験のためにピアノをやめる学習者が減る可能性があります。

また、早稲田大学本庄高等学院の自己推薦入試では、ピティナ・ピアノコンペティションの結果を活用して、7年連続で合計8人が合格されています。そのほか、聖徳大学児童学部においては、ピティナ・ピアノコンペティションの入賞履歴により、入学金を免除されています。

このように、着々と広がりつつある入試でのピアノ歴活用がさらに拡大するように、今後とも学校関係者やピアノ学習者への働きかけや周知活動を続けていきます。

〈3〉リトミック指導の普及でピアノ学習の基礎を作る

骨格の発達などの問題から、ピアノを弾き始めるのは概ね4才くらいです。2～3才児の段階では、リトミック教室で音感を鍛え、音楽への親和性を高めておくことでピアノ学習の基礎を作ることができます。共働き世帯の増加にともない、今後は保育園に通う子どもの比率が高くなると思われますが、リトミックは比較的保育園で経験する割合が高く、3割以上の認可保育所等で実習が行われるなど、リトミックが広がりつつあります。こうした状況の中、リトミックを指導するライセンスを普及させることにより、今後ピアノ教室へ通う可能性のある生徒さんを増やすことができ、将来のピアノ学習継続やピアノ生徒数の維持につながると考えています。

〈4〉弾きたい曲を弾いてもらう

ピアノ学習者にとって、いつか弾きたい「憧れの曲」を持つことや今「弾きたい曲」を弾けるようにすることはピアノ学習継続に直結します。

子どもにとって弾きたい曲は、アニメで聴いた曲、幼稚園で歌った曲などかもしれません。それらの曲を指導者が目の前で編曲する実力を身につけるための研修会を実施しています。また、ピティナが運営するネット最大級のピアノ・鍵盤音楽データベース「ピティナ・ピアノ曲事典」には、編曲を登録できるインフラを整えたところです。「憧れの曲」を持たせる具体的な取り組みはこれからですが、ウェブサイトで公開中の「ピティナ・ピアノ曲事典」の整備と拡充、鑑賞教育のメソード開発によって実現できると考えています。

〈5〉個人間での中古売買の活性化でアコースティックピアノの普及

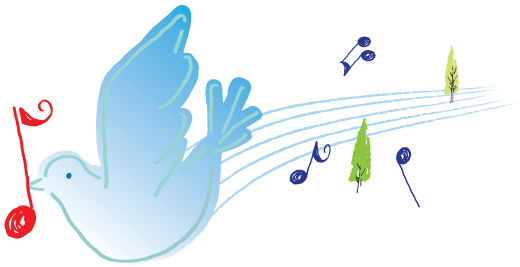
生徒さんの所有楽器とピアノ学習継続年数について正確なデータはありませんが、ピアノ指導者の話を総合すると大きな関連があります。

アコースティックピアノを購入しないのは、住宅環境により音が出せない、いつまで続けるかわからないのにアコースティックピアノは買いにくいといった理由が聞かれます。しかし、アコースティックピアノは、いったん中古になると数年で大幅に値下がりすることはありません。消費税が掛からない個人間取引が活発化すれば、中古で購入したピアノを使わなくなったとしても、買った金額で売れるといったことが可能になるかもしれません。

それを実現するためには、設置場所に出入りしてピアノ本体の質を認識している調律師さんによるピアノ査定や証明が有効と考えています。今後、個人間取引サイトとピティナや調律師さんとの連携を通じてピアノの個人間取引が活性化すれば、アコースティックピアノを所有し、練習する子は増え、ピアノ学習継続年数が伸びることも期待されます。

4.音楽大学との連携

ピアノ指導者の多くが音楽大学・大学音楽学部（以後、音大と称す）を卒業している中、音大のピアノ科進学者数が減少しているため、将来ピアノ指導者が不足することが懸念されています。音大進学者を増やし、卒業生に職業としてピアノ指導者を選択してもらうために私たちは次のような活動をしています。



〈1〉音大卒業者のキャリアパスを提示「ピアノ指導者」という進路

音大卒業→一般就職→ピアノ指導者というキャリアパスが成功しているケースが見受けられます。このキャリアパスを大学受験前に示すことで、就職できないといったイメージを払拭し、音大進学を促進します。

〈2〉音大選択へのインフルエンサー もっと音大を身近に！

高校生が大学を選ぶ際に大きな影響を与えるのは、保護者を除くと高校や塾の先生です。高校や一般科目の塾は音大進学を勧めませんので、ピアノ指導者が音大を知り、生徒に進学を勧めることができるだけの知識を持つ必要があります。各音大と連携を取り、音大のキャンパスでピアノ指導者向けのセミナーや生徒向けのコンクールを実施させてもらい、ピアノ指導者と生徒の双方に音大が身近な存在となるように活動を進めています。

〈3〉音大で指導者ライセンス取得コース

たとえば、洗足学園音楽大学の大学院では、当協会で実施している指導者ライセンスを取得できるようカリキュラムを組んでいただいています。まずは、大学院でピアノ指導を学んだ修了者一人ひとりにフォローを行い、それらの実績を踏まえて、他の音大でも同様のケースを増やしていきたいと考えています。

5. まとめ 調律師の皆様とますます連携を

ピアノ教育に楽器「ピアノ」は必須です。販売数量において新品＞中古だった昭和の時代から、平成を経て次の時代には、明らかに中古（レンタル）＞新品の時代が訪れます。その時代にも引き続き重要な役割を担うのが、ピアノ調律師の方々です。ピティナとして、調律師の皆様とますます連携を深め、様々な活動を展開しながら、ピアノ学習継続年数の増加に努めていきたいと思います。

前回の入賞者・関係者集合写真
写真提供：浜松国際ピアノコンクール

第10回
浜松国際ピアノコンクールを前に（公財）浜松市文化振興財団を訪問

伊東 基貴
（日本ピアノ調律師協会参与／中部支部）

ピアノ調律師が主人公の小説『羊と鋼の森』（宮下奈都 著）が、２０１６年度の本屋大賞を受賞し、１２０万部のベストセラーになり、映画化されて今年一般上映されました。さらに、昨年２０１７年度の本屋大賞は、『蜜蜂と遠雷』（恩田陸 著）というとても読み応えのある長編小説で、舞台は国際ピアノコンクール。こちらは、直木賞とのダブル受賞でした。

どちらも、キーワードはピアノ。片や調律師を廻る物語、もう一方の『蜜蜂と遠雷』は、国内架空の地方都市が主催する国際的なピアノコンクール。そこを舞台に世界中から参加する個性豊かな人物たちの人間模様が描かれ、ここにも調律師は重要な役割を担って登場します。これは明らかに浜松国際ピアノコンクールがモデルだということは推測できると思います。

その、浜松国際ピアノコンクールこと「浜コン」は、１９９１年の第１回から３年に一度の開催です。今年、２０１８年は、第10回が11月８～25日の期間に予定されています。

本選が行なわれる大ホール
写真提供：浜松国際ピアノコンクール

小誌創刊にあたって、ピアノ調律師とピアノコンクールは切っても切れない関係でもあることから、浜コンの主催事務局であるアクトシティ浜松内の公益財団法人浜松市文化振興財団を訪ね、そこでのキーパーソン、芸術振興担当課長で浜松国際ピアノコンクール担当の伊藤渉さんにお話をうかがいました。

大規模、長期間のコンクール 調律師のサポートはとても重要

――国際ピアノコンクールを主催する、しかも世界的にみてもかなり大規模な運営は大変でしょうね。

伊藤　浜コンは、まず80名ほどの参加者が世界中からやってきます。そこで第一次、第二次の予選が行われて24名になります。現在40名程度から予選がスタートするコンクールが主流の中、いかに規模が大きいかはおわかりになっていただけると思います。そして第三次予選で12名を経て本選では6名が残ります。その間の期間は長く、練習用のピアノと場所には最大の気配りをしています。それも浜コンの特長のひとつです。調律師さんたちのサポートはとても重要です。

出演者のパネル
予選を通過するたびにリボンが付けられる
写真提供：浜松国際ピアノコンクール

――ＮＨＫがテレビで、ショパンコンクールでの調律師を、ドキュメント番組としてとりあげたおかげで、本来裏方だったはずの調律師が脚光を浴びることに、そして小説『羊と鋼の森』では調律師が主人公で、映画にもなり話題になっています。更に浜コンが舞台と思わせる小説『蜜蜂と遠雷』でも調律師が登場します。

伊藤　ピアノコンクールの場合、他の楽器と違って自分の弾きなれた楽器を持ち込めないという、ピアニスト独自の宿命というか条件があります。浜コンもそれは同じです。参加者はそのことについてはナーバスになると思います。今さら言うまでもなく、その条件は了解の上での参加になりますから、演奏会場のピアノの状態はもちろん、先ほど言いましたが、浜コンでは参加者の練習場でのピアノの状態にも最善のコンディションに気をつけています。それから、期間中に参加者が出張コンサートの場に出向いて演奏するのも、このコンクールの特長です。

……

浜松市は、かつてはピアノメーカーがひしめき合うように市内に点在し、国内を代表するピアノの街として海外にも発信してきました。現在も自治体として、音楽都市であることを全面的にアピールしています。そこでの国際ピアノコンクールは、今回で10回（27年目）を迎えます。

4度の取材を重ねて、コンクールの醍醐味を見事に描いた『蜜蜂と遠雷』

――ところで、本屋大賞と直木賞を受賞した小説『蜜蜂と遠雷』についてなんですが、奇想天外に思えるキャラクターの登場人物が、つぎつぎに展開していく物語は、読み進めていくとすっかり夢中になってしまいます。ピアノコンクールの臨場感が伝わってきます。なかでも、取り上げられる楽曲について、それがロマン派から続く二十世紀にかけての、ちょっと難解な曲であっても、あたかもその曲が、登場人物それぞれのパーソナリティによる演奏表現が感じられる文章になっていて、コンクールの醍醐味が巧に表現されています。

浜松市文化振興財団 芸術振興担当課長 伊藤渉さん
© Motoki ITO

伊藤　作者の恩田陸先生ご自身からお聞きしたのですが、浜コンへは4度（第6回2006～第9回2015）通って構想を練られたそうです。それくらい国際ピアノコンクールの舞台は興味が尽きないということでしょう。それ以上に、音楽の文章表現には苦労されたそうです。

……

コンクールの醍醐味というと、普遍化された音符で書かれた楽譜を読み解き、自分独自の音楽表現でアピールし、聴く者を魅了することにあります。音場空間で放たれる音が、同じ曲を同じピアノで弾くにもかかわらず、それぞれの表現がずいぶん異なり、技巧を凝らしたパ

フォーマンスを競うのがコンクールです。そこに、参加者たちは明日の自分を賭けるわけです。しかし、ピアノという楽器は、会場に準備されたものを使用しなければならず、それには高いクオリティが求められます。自分にしか操れない、磨きぬかれた音をコントロールしなければなりません。音を仕上げる調律師の存在は、裏方ではありますが、パートナーとして重要です。

リアルなドラマの幕が開く

伊藤　私自身は、音楽の専門教育を受けているわけでもなく、あくまでも浜松市文化振興財団の職員として関わっているのですが、そこで繰り広げられるドラマには感動を禁じえません。ちょっと本筋からは逸れますが、世界中から集結する参加のコンティスティアンとコンティスティアンヌが、コンクールで知り合い、その場を共有したことによって結婚にまで進展したエピソードがあります。コンクール期間中の特別で濃密な空気感は、関係したスタッフたちにあっても等しく共有されていて、過去の出場者たちがその後、浜松で演奏の機会があれば、彼らは「浜松に帰る」と、一様に言います。人生の最も大切なページになっていることが、スタッフである私たちにもよくわかります。そんな意味から、調律師さんとの関係性も特別なものが生じたりするかもしれません。これからはじまる、第10回浜コンでも、どんなドラマが待ち受けているのかとても楽しみです。

……

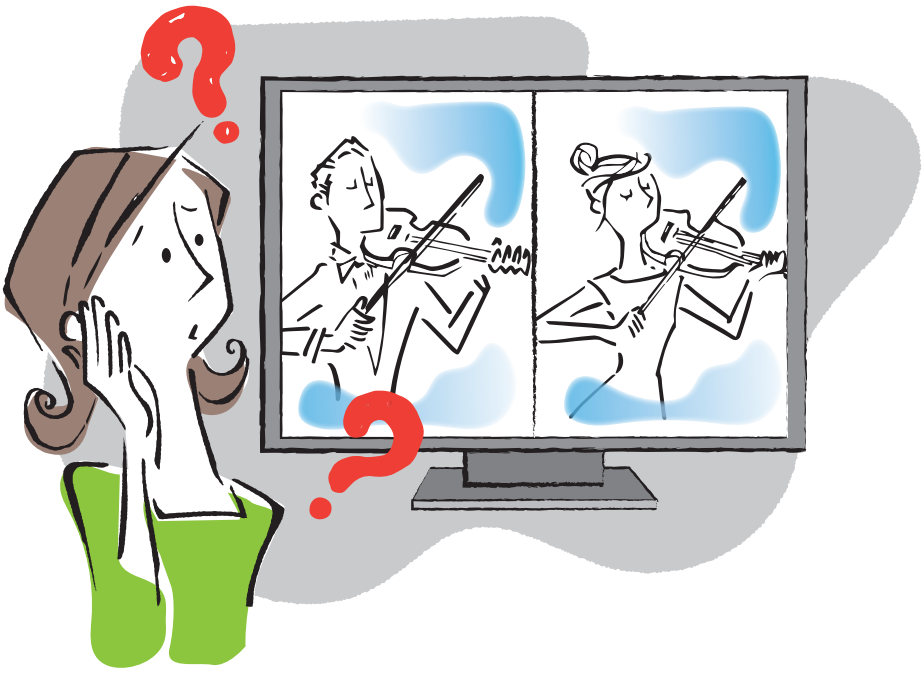
伊藤さんが話すふしぶしにこめられた思いは深く、そこからは、言葉として相応しいかどうかわかりませんが、調律師とピアニストの、あたかも戦友関係と言ったらいいのか、ピアノコンクールならではのナイーブさが生み出す、緊張感に富んだ確信性を担っているのだと思いました。

10回目を迎える浜松国際ピアノコンクールに、注目してみてはいかがでしょうか。そして、翌年2019年5月25、26日に同じ場所アクトシティ浜松を会場に開催される、IAPBT（国際ピアノ製造技師調律師協会）浜松世界大会「Piano Piano Piano」や一般社団法人日本ピアノ調律師協会のことを、コンクール参加者や審査委員をはじめ多くの関係者の方々に認知していただけたらと心から願っています。

前回の覇者　アレクサンデル・ガジェヴ氏
写真提供：浜松国際ピアノコンクール

音の良い悪いがわかる人

吉川 武文
（日本ピアノ調律師協会会員／関西支部）



高級バイオリンと低価なバイオリンの音を聞き分けられるか、というようなテレビ番組などがありますが、みなさん、テレビの前で正解されていますか？

これは正解できなくても問題ないし、恥じることではありません。聞き分けられるということは、それらの音を聞いた経験があり、それぞれの音色を覚えているということなのです。考えてみてください。人間は生まれた時に、ピアノの音とかバイオリンの音を聞き分けているでしょうか？

音は空気の振動です。それが耳から入って鼓膜を揺らして、脳に電気信号で伝えられます。その信号を元に脳は脳内にあるデータと照合して、「これは何の音だ」と、判断しているのです。つまり、生まれたての人間の脳には音のデータは空っぽで、成長するとともに、経験した、聞いたことがある音を覚えていくのです。

さて、最初のお話。高級バイオリンと低価のバイオリン、あなたが生まれてから現在までにどちらの音も聞いたことがなければ、判断できるはずがないのです。いや、ちょっと待てよ、私はどちらも聞いたことがあるのでわかるはずなのに間違えた。そんな方もいるでしょう。それはテレビというシステムに騙されているのです。

人間の耳は1秒間に20回振動する20Ｈｚの低い音から、２万回振動する高い音２万Ｈｚまでを音として判断できると言われています。楽器の音には、もっと低い音（低周波）も、もっと高い音（超音波）も含まれていて、それも音色の成分だと言われています。さて、テレビのスピーカーはこの20Ｈｚ～２万Ｈｚを再生しているでしょうか？　もっと言えば、出題用のバイオリンの音を拾っているマイクはこの周波数を全て拾っているでしょうか？　普段、通勤、通学で使用しているヘッドホンも、再生周波数性能表を見ると20Ｈｚ～1.7万Ｈｚと表記されているものが多いです。つまり、生音で聞く音とテレビやヘッドホンから聞こえる音ではずいぶん違うということです。

なので、テレビで聞いて聞き分けができなくても仕方が無いことなのです。良い音と悪い音を聞き分けることができる人は、良い音も悪い音もいろいろと聞いた経験があり、それを記憶しているから聞き分けられるのです。

調律師はピアノの音をつくります。良い音をつくる調律師は、過去にいくつもの良い音を聞いて、記憶していることが必要なのです。

豆知識

一般的なピアノの最低音Ａは27．５Ｈｚ、88鍵目のＣは４，１８６Ｈｚ

自然音、生活音、楽音

松本 憲治（作曲家・指揮者・演出家）

広島市出身。東京藝術大学音楽学部声楽科卒。在学中より作曲を高田三郎、島岡譲、早川正昭、その他の諸氏に師事。現在、オペラの指揮、演出を中心にクラシックステージや現代アートイベントの企画・制作・構成・作曲・演出、のみならず、ミュージカル、演劇、ダンスステージの演出も手がけている。

先だって、東京・三軒茶屋にある音響技術の粋を尽くした感のある某ホールに出向き、フランクのヴァイオリン・ソナタなどを聴いた。極上のひととき。現代のコンサートホールは、完璧な静謐性と計算された理想的な音響を追求した人工的な密閉された空間。そこで演奏される例えば室内楽の名手による演奏に包まれる贅沢は、つくづく貴重で特別な時間だと実感させられる。

ただ、思い出したことがある。若い頃、チェンバロ、ビオラ・ダ・ガンバ、トラベルソ、リコーダーの古楽グループと、ルネサンスからバロックまでの曲目を持って田舎の教会回りのコンサートをした。私は構成・編曲・司会。あれは初夏の土曜日、午後、瀬戸内海のほとりの古い小さな教会。お客さんが40～50人。通奏低音がオスティナートを刻み始め、同時にチェンバロが乾いた銀砂を巻き始める。すると教会の外、遠く微かに子供たちの声、遥かに遠ざかる車の音。それからリコーダーがアリアを歌い始める。――地域の穏やかな生活音、自然音を受け入れ、これはこれで、うっとりとした時間であった。いまでも蘇る。

もう一つ。現代音楽だがシュトックハウゼンの「KONTAKTE」という曲がある。1960年頃作曲されたもので「電子音、ピア

ノと打楽器群のための」という副題。これを学生時代、下宿で窓をあけ放ち、一人、レコードをかけて聴いていた。電子インパルス発生器による電子音と、ピアノ、打楽器による衝撃音、破壊音、不意の沈黙に満ちた曲で30分あまり、緊張に満ちた持続で好きな曲なのだが、その時、妙なことが起こった。レコードは確かに終わったのに先ほど曲中で時折「効果的に」挟み込まれていた破壊音、衝撃音がまだ続いている……。何事か！と音のありかを探ってみると何のことは無い、近所の人が下宿近くの地域のゴミ集積所に、壊れた板ガラスを投げ棄てていた音だったのだ。それがちょうど上手く「共鳴」したのだと一人で笑ったことだった。

自然音と楽音と。これも若い頃必要にかられ、音響学、音楽物理学、音響生理学などの本を「付け焼刃」で手当たり次第読み漁っていた時期があった。

当時の音響学関連の本の冒頭は、まず「音の種類」として「雑音（騒音）・語音・楽音」と三つに分け、それぞれ「趣旨」「物理的特性」の違いを説明している。このうち「語音」に関しては「社会的な意味を伝達する声による音」ということなのだが、「雑音（騒音・ノイズ）」「楽音」に関しては、これは容易に入れ替わる。入れ替えるのは人の美意識なのだが、その頃たまたま覗いた古本屋で見つけた本に、こんな美しい文章があった。

やかましい都會ではもちろんのことどんなに人里を遠くはなれた静かな山奥に行っても『音』はあります。私たちが普通に生きてゐ（ママ）るところでは完全に音がなくなることは決してありません。私たちは生まれたときから死ぬまで音に絶えずとりまかれているのです。……（以下、略）

これは、昭和17年岩波書店発行の『音とは何か—少国民のために』と題された本の冒頭はしがき。著者は小幡重一。例によってWikipediaで調べてみると、彼は１８８８年（明治21年）生まれ、東京帝国大学理学部物理学科卒業。逓信省電気試験所に所属、１９３６年（昭和11年）に日本音響学会を設立し１９４７年（昭和22年）没、となっている。この人の最初の著書が１９３１年（昭和6年）の『音楽愛好家の為の音響学』だそうで、戦前の理学博士の著書と言いつつも教養深くよほど音楽好きだった人なんだろうな、と思ってしまう。時折眺めてみる本の一つ。

この本、「少国民のために」というからには少年少女向けの「理系案内書」なのだろうが、なかなかどうして文章が上手く、以下こんな感じである。

序章・音の世界（旧カナ、旧字使用）

諸君は朝、目を覚ます時、なんで目を覚ましますか。目覚まし時計ですか。それともお母さんかお姉さんが諸君の名を呼んで、「もう六時ですよ。起きる時間ですよ。」といってくれるからですか。それとも目覚まし時計にも、お母さんたちにもたのまず、ひとりで目をさまし、明るくなつたそとで雀たちが朝の寒さとすがすがしさとに身をふるはせて鳴いている聲をききながら、もう起きるころだと勢いよく床からはね起きますか。……（以下、略）

いいですねえ。「古き良き」時代を思わせるこんな文体でまず「一日の音たち」を描写していき、次いで「四季の音」。晩冬から春、夏、秋、そして再び冬までの様々な自然の音、生活の音たち。

……（中略）収穫の秋もすぎ村祭りの太鼓も鳴りをわると、やがて野山に黄色が満ちだんだん気候が寒くなってきます。そして或る日烈しい風が吹き始めます。風は赤くなった木の葉を最後の一枚までも枝からもぎ取ってしまはうとして木や枝や幹を吹き曲げ、長い叫び聲をあげます。……（以下、略）

もちろん現代の読者相手のテンポや今風エスプリを配した文体ではなく、いささか「古い」と思われるだろうが、内容は結構深く、全6章に渡って音現象の物理学的、音響学的な説明や耳の生理学的な話、楽音の共和、不協和の解説などを豊富な図式、グラフ、表、イラスト、（当時の）生活写真などを使用しつつ判りやすく展開していて、個人的にはこれは「古い」というより「古典的」な教養書だなあ、と思ってしまい、改めて自然音が愛おしくなってくる。そして密閉された理想的な音響空間での演奏もいいし、扉を開け、自然音に包まれた演奏もいいなあ、と贅沢なことを思うのだ。

自然音に包まれた楽音、というと、私はいつも有名な次の詩を思い出す。これは詩人が実際に経験した場面から詩作されたそうである。

田舎のモーツァルト

●尾崎喜八

中学の音楽室でピアノが
鳴っている。
生徒たちは、男も女も
両手を膝に、目をすえて、
きらめくような、
流れるような、
音の造形に
聴き入っている。
そとは秋晴れの安曇平、
青い常念と黄ばんだ
アカシア。
自然にも形成と傾聴のある
この田舎で、新任の若い
女の先生が孜孜（しし）として
モーツァルトのみごとな
ロンドを弾いている。

このロンドは、K.331のピアノソナタの第三楽章、通称「トルコ行進曲」である。多分、教室の外では時折小鳥が鳴き過ぎ、遠くで牛の鳴き声などもし、その音に包まれてこのロンドは輝いていただろう。子供たちはその音世界に「丸ごと」感応していただろう。

ドイツ音事情

矢作 クノップフ 有香
（日本ピアノ調律師協会会員／ドイツ在住）

ドイツに暮らし始めて６年。年に１度は日本に一時帰国をしているし、その期間は６～10週間だったりします。ドイツの習慣やルールに慣れないといけないのは住民となった今、当たり前なのですが、こちらでの生活が当たり前になってくると、日本に一時帰国した際に、しみじみその違いに驚かされたりします。

街に音楽が溢れていること。

コンビニの自動ドア、駅のアナウンス、電車の扉の開閉時の音楽、店内のＢＧＭなど。

ドイツでは、

⇓そもそも自動ドアがそんなになく、大きな重い扉を体当たりで開ける。無音。

⇓駅のアナウンスはドイツ語と英語のみ。音楽無し。

⇓電車の扉の開閉時。最近はＳバーンという東京でいうＪＲのような電車ではピーピーピーとけたたましい音が鳴る。音が導入されたのも２０１６年ころだったような。その音が導入された

時は耳をつんざく痛い音。きっとクレームが入ったのであろう、2ヶ月ぐらいしたらちょっと音が低くなりました。

地下鉄は駅に到着時や扉の開け閉めでは音はありません。その代わり、駆け込み乗車などで扉を押さえたりすると、その扉の上からけたたましい音で文句がつきます。

⇓店内のBGM…あまりかかっていない。

公共交通機関での話し声の大きさ。

大きな声というより、普通の声で話しているドイツ人はいません。これは恥ずかしながら、自分の両親がドイツに来た時に感じたこと。年を取っているので耳が多少遠くなっているであろう…、異国の地、テンションが上がるのも仕方がない…と諦めていたけど、そうでもないらしい。観察していると、ドイツ人は静かにひそひそ声で話している。推測するに、ここには文化の違いを感じます。日本では、「ひそひそ話し」は内緒話でネガティブなイメージ。子供の頃に、「ひそひそ話しは人前ですると失礼にあたったりするのでしないこと」と大人にたしなめられたような記憶が甦ってきた。小さい声で話すことに慣れていないのかもしれません。反対にドイツでは、場所に合わせて声の調節をすることを教えられるので、ひそひそと声のトーンを落として話すことができるのです。

それでも最近は、ICEというドイツ鉄道の新幹線にあたる電車の中に、口の前に人差し指を立てた顔イラストが貼られるようになりました。外国人向けのような気もするし、特に静かにしたい人が座るシートがあったりもします。権利を主張する国らしい対策です。

Ruhezeit（ルーエツァイト）

日本にはない条例のひとつにRuhezeit（ルーエツァイト）というものがあります。シエスタのようなものと言えば聞いたことがある方も多いのではないでしょうか？

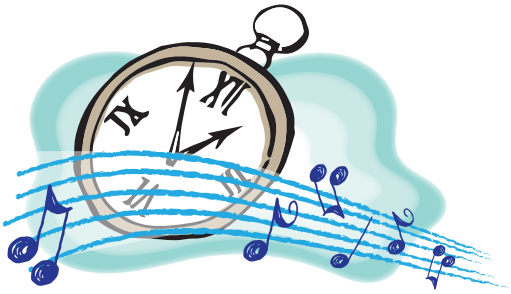
都市の多くは集合住宅ですので、多くの街にはRuhezeit（ルーエツァイト）と言って、静かにする時間帯があります。平日は22時から翌7時までと13時から15時までです。この時間帯は掃除機を使わないこととされています。驚くことなかれ、ドイツの掃除機はとっても音がうるさいです！ 日本の掃除機であれば使っても大丈夫かも？

芝刈り機もこの時間帯は使ってはいけませんし、テレビやラジオも室外にもれない程度まで下げます。逆に朝の7時から業者さんの大爆音の芝刈りや大工さんの工事が始まったりすることもあります。

楽器演奏

私が住むフランクフルトでは、Ruhezeit時は「騒音法」で禁止されています。この時間帯以外で、1日2時間練習や騒音が許されています。そして、音楽専門家の場合には、賃貸契約の際には必ず演奏可能範囲を契約書に記入し、その範囲が保証されているようにします。

職業音楽家の場合には、月～金までの9時～13時、14時～19時。土・日・祭日は9時～13時、15時～18時が許されています。合奏もこの時間帯に許されていますが、同時に各自が練習するということは許されないそうです。



こんな面白い話があります。私の友人ピアニストが住む集合住宅の上階に物書きさんが引っ越してきたそうです。その物書きさんは、彼女の演奏を聴いて、職業演奏家ということを察して、『自分がどのくらい彼女の権利を聞き入れないといけないのか』と役所で調べたそうです。

それ以外でも自分が留守だったら構わないよ、ということになり、お互いに留守の時間帯を相手の玄関の扉にメモを残し、「気兼ねなく弾いてね」と「安心してお家でお仕事して」と、やり取りしたそうです。でも結局物書きさんは2年くらいでお引っ越ししたようですが。

そんな条例もご近所で厳しいかどうかですので、調律に伺う時には一応お訊ねしていますし、ご近所に了承をとるなり、張り紙をしていただくようにしています。一応調律は家庭内工事とみなされるので大丈夫だとは思いますが、ご近所との不和は避けた方がよろしいのでお伝えさせていただいています。

また、週末や特別なパーティーの時には、掲示板にそのお知らせをしておきます。

「○月○日　○時～　誕生日パーティーをします。良かったらいらしてください。」とお招き文も添えて。お招きは社交辞令なので実際に来ることはないですが、ご近所で仲良しの場合は、お祝いしにちょっとお邪魔してビールや食事をつまませてもらって、「楽しんでね！（＝今日は騒いでもＯＫよ）」と伝えて帰ります。因みにこちらは誕生日の人がみんなを招待します。

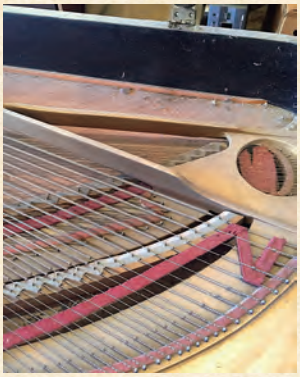
寒い冬仕様のドイツの建物は窓を閉めれば外の音もほとんど聞こえません。教会の鐘も田舎に行けば、時間がくると夜中でも鳴っていることもありますが、都市では22時～5時くらいは鳴らないようです。

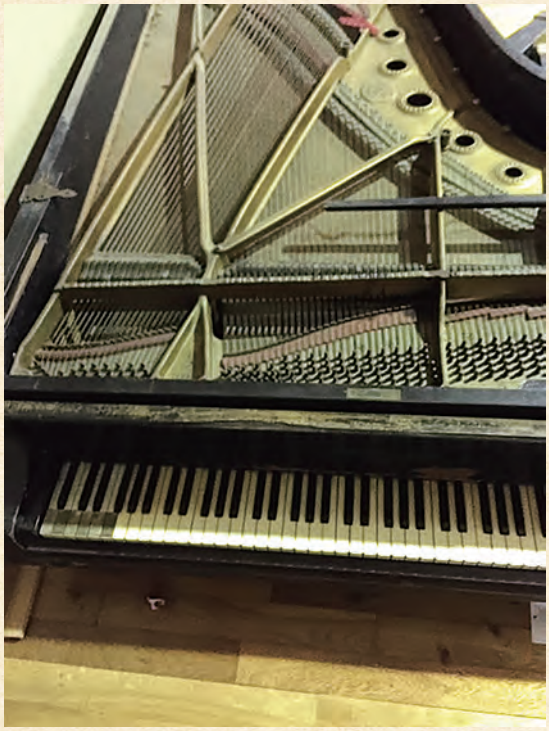
所変われば音問題。音楽留学を目指している方の参考になればと思います。

ドイツを訪れる際にはこんな『音事情』を気に掛けてみてください。

スタインウェイB型オーバーホール

広瀬 忠宏
（日本ピアノ調律師協会会員／四国支部）





2016年のある日、某所より「記念事業の一環として、この眠ったままのピアノを復活させたい」とお話を頂きました。"眠ったままのピアノ"とは、大正13年1924年製造のスタインウェイB型グランドピアノです。「寄付の限られた予算で」ということでしたので、どこまで手を入れるかが肝になりました。

下見に行くと、脚とペダルは外されて、ベッタリ床に置かれていました。中を確認すると、凄まじい埃、作動部が動かない、白鍵の剥がれ、音はモコモコ、ハンマーには深々と弦の溝が…。しかし、なぜか断線は無い。とりあえず梱包して運び出し、工房で詳しく状態を確認しました。オリジナルな部分と以前に直した部分が、もはや判別しづらい上に、現行のスタインウェイとは部品もかなり違っ

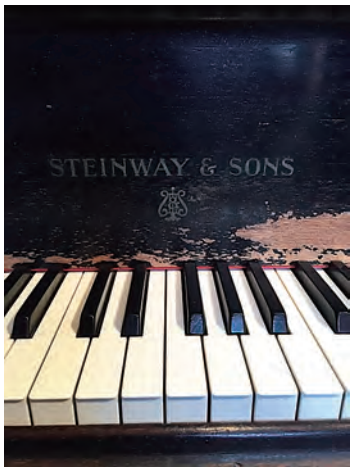
ていて、無い物は作らないといけません。頭が痛い。予算を考えると、部品交換を伴うと簡単に予算オーバーなので、必要最低限のパーツ交換とし、在るものを最大限に生かしてしのぐことにしました。

しかし、在るものを生かすと言っても、かなり摩耗が進んでいて厄介極まりない。まず外装関係。屋根は外れていて部分欠損、ヒンジ（蝶番）が変形、鍵盤蓋の回転金具あたりが損傷して蓋は入りません。何より酷いのは、ペダルでした。

キャスターも回りませんでしたが、全て使用に支障無いように修理。弦関係は、断線修理箇所はみられますが、音律をキープ出来ない調律ピンはありません。調律は半音低く、3日かけて少しずつ上げて行き、バス弦を切ることも無く、高音部1箇所切っただけにとどまりました。

アクション（弦を打つ為の機械的な仕組み）は、折れが数カ所。換えずに継ぎで修理。一番鍵盤のハンマー（弦を打つ発音体）欠損で、仕方なく同一メーカーの余り物を使用。使える物は使い、クロス類は全交換。ハンマーは全体形状を維持し、削りあげる。かなり小振りになったがまだ行けます。

鍵盤関係。白鍵は何故かセルロイドが貼られ、部分的に象牙が残っている。剥がれて木地の部分もある。ここは全部張り替えました。金属部との接点クロスは蒸気あてとマル秘技で復活。



あとは、壊さないように慎重に整調。言葉は悪いかもしれませんが、腐っても鯛。整音はほとんどしておりませんが、それらしい音が出ます。まあ、ビンテージ感アリアリな感じですが。

私が思ったことは、徹底的にレストア、オーバーホール等するのも良いと思いますが、在るものを生かしきる直し方もアリかな？ でした。

オーバーホールを終えてお届け

チェック!!
https://youtu.be/SBMOqYBeY20 から
完成後の演奏会の様子が見られます。

おと オト 音

調律師の仕事を紹介する「12歳のハローワーク」

鶴田 義幸
（日本ピアノ調律師協会会員／東北支部）

日本ピアノ調律師協会が２０１１年度から取り組んでいる事業に「12歳のハローワーク」というものがあります。ピアニストとともに地域の小学校を訪ね、「調律師の仕事」を知っていただくのが一番の目的です。ピアノの歴史や構造を説明し、実際にチューニングハンマーを用いて音合わせ体験もしてもらいます。そうして調律が済んだピアノでピアニストが演奏する、という高学年向けの出前授業です。

我が青森エリアにおいては、２００８年度から「岡田照幸のピアノであそぼう」というタイトルで、青森市・八戸市・弘前市の小学校で事業を展開しており、「12歳のハローワーク」が始まる3年も前から独自に認知度向上に取り組んできました。

給食前の2コマを使い、岡田先生の

演奏でスタート。その間、スクリーンには鍵盤上を飛び跳ねる両の手が映し出され、児童たちはその動きに圧倒されます。

演奏が終わると1曲ごとに楽曲についてのお話。作曲家の人となり・時代背景などを説明します。スクリーンには作曲者の肖像画が。

そして、いよいよメインイベント、協会のPRタイム。調律師の仕事内容を説明し、アクションを机の上に載せ、ピアノの構造を説明します。それから数名の児童に音合わせ体験をしてもらいます。そのあと外装を取り付けて岡田先生の演奏が再開、最後は校歌斉唱と、あっという間の2時限です。

今年度も6月1日に青森市立浦町小学校に於いて、「岡田照幸のピアノであそぼうvol.11」を無事終えることができました。

学校により児童数にバラツキはありますが、1年生から6年生まで全校児童が退屈することなく2時間授業を過ごせるよう、様々な仕掛けを施してくださる

岡田先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

ちょうど映画「羊と鋼の森」の公開1週間前だったので、予告編の動画とポスターの静止画をスクリーンに映しました。

羊（ハンマーヘッド）と鋼（先端処理したミュージックワイヤー）を各学年に渡し、見て触れて様々な感想をもらいました。毎回、子供たちの発想には驚かされます。

回を重ねること11回、正直よく続いたなと感じています。また、継続は力なりの言葉通り、青森エリアでは今後も可能な限りこの事業をやり続けていこうと、決意を新たにしたところです。

いつもお世話になっている岡田照幸先生のプロフィールです。

♪ 1955 年 北海道北見市生まれ。東京藝術大学在学中に大映テレビ「赤い激流」主演の水谷豊氏の演奏シーンを担当する。（毎朝音楽コンクールでの英雄ポロネーズ、ラ・カンパネラ、テンペスト等 岡田先生の演奏です）。子供からお年寄りまであらゆる世代の方々を瞬時に引き込む演奏と軽妙なトーク。岡田先生の真骨頂！

調律師人生40年のつれづれ

御堂 公治
（日本ピアノ調律師協会理事／四国支部）

なんで調律師

私自身、この調律の仕事に携わってピアノ技術学校含め40年近くになります。ピアノ調律の仕事自体それまで全く知識がなく、知りませんでした。音楽は好きで、自作のコンソールタイプ電蓄で幼い頃からレコード、ソノシート（古い）を聴いて育ちました。鍵盤楽器は自宅にあった古いヤマハの足踏みオルガンのみです。中学、高校はブラスバンドでクラリネット、大学はオケでコントラバスでは、なかなかピアノまで考えられない。ましてピアノの調律師なんて思いつきもしませんでした。笑い話で恐縮ですが、私が〝調律師〟になったと聞いた親族のなかには、〝調理師〟つまり〝コック〟になったと勘違いした人がいたそうです。当時親族に教師はいましたが、ピア

ノはとても非日常的でしたし、先述のオルガンがせいぜいの時代でした。

アルバイト中に見た〝調律師募集〟の新聞広告で、全てが始まりました。昭和40年代当時、ピアノが売れに売れていた時代。一営業所あたり一か月20〜30台販売されていて、調律も3回（後に2回→1回）のサービスチケットがついていました。当然既存の調律師さんでは仕事が回らないので、私たち機械（チューナー）で調律するサービス専門の調律師（S.T、サービスチューナーまたはストロボチューナー）が約3か月で養成されていました。この〝調律師募〟はサービスチューナーの募集でした。サービスチューナーでしばらく仕事をした後、希望者は研修を経て〝音叉〟で調律するシニアチューナーとなります。この制度は少し後に廃止され、普通の1年間での調律師養成のみに移行していきました。おそらくは日本だけの制度・仕組みでしょうが、当時全国で大活躍したはずです。

何しろ耳で合わせるのはユニゾン（同音）のみ、整調授業もアップライトピアノ（UP）のみで、グランドピアノ（GP）整調は一通りの手順確認のみで卒業。恐ろしいことに即実践配置です。やはりグランドピアノを触ってみたくてしょうがないので、先輩に頼んでカバン持ちの体で連れていっていただきました。もちろん見ているだけで、たまに触らせていただきましたが、やったことは素人でも可能な作業。それでもアップライトにない鍵盤感触と音の変化にビックリしていました。

1年くらい後で初めてGPの調律依頼がきた時は、感激しました。納入調律から携わっていけたのは更に半年後でした。このピアノ、所有者は変わりましたが今も調律させていただいています。鍵盤修理、ハンマー交換、弦の張り替え、ダンパー（音を止める機構）も含むオーバーホールもこのピアノが初めてでしたので、とても思い入れのある楽器です。

コンサートデビュー

忘れもしない〝調律師〟になって5年目、実質外回り3年目くらいの時です。当時の社は四国中核店舗の位置づけでした。ボーリング場を改装して、一階駐車場、二階（店舗）デポ、三階事務所、四階音楽教室。ホールをリノベーション移転したばかりでした。そのホールとピアノの柿（コケラ）落としを兼ねて、著名なジャズピアニストのコンサートが開催されました。その調律を何故か新米の私に指示があり、諸先輩を差し置いての指名に戸惑いながらも舞い上がりました。

リハーサルに立ち合い、その時点ではプロの素晴らしいテクニックに感動。なぜか上司から本番も立ち会うように指示され、舞台袖にスタンバイしました。

さて、その本番にビックリ。最初スタンダードナンバーから入って、その同じフレーズが変化。ココまでは想定内。ところが中盤から興に乗ってくると強烈なタッチで鍵盤を叩きつけ、挙句の果ては強烈な肘打ち、腰を載せてのダメ押し。

満員の聴衆は大盛り上がりでしたが、袖に待機していた新米 ”調律師“ は愕然としてしまいました。

当然インターバルでの再調整を覚悟していましたが、ピアニストはこのままでよいとのこと。このぐらい崩れている方が音楽的に演奏しやすいとのお達し。この時初めてこの度の調律指名の意味が分かりました。納得。諸先輩はこのピアニストの評判を承知されていて、生意気な新入り新米の鼻を折ってやろうとしていたのです。

見事に鼻は折れました。コンサート終了後の深夜にかけての手直しは当然のことでした。ただし、この時、《音楽》の多様性、個性はミュージシャンによって違いがあり、普遍的な調律、音作りは不可能ではないかと感じました。もちろん、この後いろいろな失敗をしましたが、最終的にはこの時の強烈な印象が今になって役立っていると感じ、当時の諸先輩に感謝申し上げています。

オーバーホール

今から30年くらい前、社の各拠点に修理工房を立ち上げていきました。高松にも運送業者倉庫内に小さいプレハブを作って、主に香川県内ユーザー、四国のディーラーさんから修理を受注して作業を開始しました。後に運送業者と提携移転して本格的な工房となりましたが、事件は旧の工房で塗装作業中に起きました。

当時、塗装も伴うオーバーホール作業は設備も含めて未経験分野で、全て手探り状態でした。大阪の技術者（塗装）の方々に教えを請い、塗料、工具等もその都度入手していましたが、何と言ってもピアノフレームを人力で上げるという荒業もしていました。その頃は設備も整っていない状態で、もちろんプレハブ内にはエアコン、換気扇もありません。この換気扇が無かったために後述する事故が起こり、危うくの状態を招きました。

ある日、修理で預かっているグランドピアノフレームを取り外した後、響板の塗材をシンナーで洗い流してしまう作業を一人でしていました。しばらくすると何か頭がぼうっとしてきて、工具を取り落としそうになりました。”はっと“ 気づいて外に出ました。そうです、6畳位のプレハブ内で換気しないで剝離作業をしていましたので、シンナー中毒になりかけていました。それからはドアを開けて作業をしましたが、薬品に対する基本的知識に欠けているととんでもないことになる痛い思い出です。

バックステージから ～回想『羊と鋼の森』の世界～

松岡 博明
（日本ピアノ調律師協会会員／北海道支部）

はじめに

日本ピアノ調律師協会では4月4日の「ピアノ調律の日」にちなみ、PR活動として各支部主催の記念コンサートを行っています（通称：44（よんよん）コンサート）。北海道支部では、2016年の本屋大賞を受賞し、今年映画化されて話題になったピアノ調律師を主人公にした小説『羊と鋼の森』の作者、宮下奈都さんを迎え、トークとコンサートで構成する記念事業を、4月7日に札幌コンサートホールKitaraで行いました。その企画から開催に至るまでの舞台裏の様子をご紹介します。

本屋大賞「羊と鋼の森」映画化
作者・宮下奈都さんを迎えて コンサート開催　舞台裏

ピアノだけが照らされた明かりの中にいる調律師。静かに音階を弾きはじめる。ポーンとAの音を何度も叩き、3度、10度の音が加わっていく。客席は当然調律しているものだと思っているだろう。

そこに突如として調和を打ち破るコード…。

暗闇から現れた女性が交差するようにしてそれを受け継ぎ、音と音楽を紡ぎだしホールに満ちていく…。

『羊と鋼の森』の世界、第2部の始まりである。

そこからさかのぼること8か月前、ある出演者から出演を快諾頂いたことから始まった。小説『羊の鋼の森』の作者の宮下奈都さんである。

『羊と鋼の森』はご存じのようにピアノ調律に魅せられた青年の成長物語であるが、2016年本屋大賞受賞、映画化され話題でもちきりである。普段は陽の当たらない我々調律師にスポットを当てていただいて嬉しい気持ちでいっぱいである。

実は過去に講演をオファーして断られたことがあった。多くの調律師の前で講演するなど恐れ多いとの理由だったが、今回は対談形式やインタビュー形式であればということで了承いただいた。

コンサート決定、しかし企画は？

しかし、ここから大いに悩むことになる。

当初は宮下さんのお話だけでいいのではないかと考えていたが、会議の中で4月4日は“ピアノ調律の日”記念コンサートなので、やはり演奏も必要ではないかという話になった。

ただ、小説『羊の鋼の森』中、曲名が描写されているのはほんの数曲しかない。

曲をどうするか…。ピアニストも問題

だった。来てくださるお客様の多くは宮下さんのお話目当てで来るはずだ。講演が終わった後、演奏部分も飽きさせずに聴かせてくれるピアニスト。となるとベテランか?または小説中のように双子の姉妹がいいのでは?など、議論は紛糾した。

演奏部分の構成にこれといったアイディアが出ない中、ふと、朗読を交えたらどうかという声が出た。曲数もそんなに多くは望めない中、賛成の声が多くあがり、スタッフ各自で構成を考えてみようということで次回に持ち越しになった。まだ誰にも形が見えないままに…。

宮下奈都さん

膨らむイメージ、頼もしい助っ人

次のスタッフ会合では皆がもう一度『羊と鋼の森』を読み返し、物語の中で核になりそうな文章や、曲名はなくともイメージされる曲を挙げていった。曲もクラシックだけでなくジャズも入れたらどうかなども。

ここで強力な助っ人に登場いただいた。札幌市芸術文化財団の青井拓也さんだ。本業ではないのだが、我々のまとまりのない意見、アイディアをセンスの良いシナリオに作りあげていただいた。この後何度も改訂してまとめてくださり、最後までお手伝いいただくこととなる。

骨子が決まってくるとイメージがどんどん固まってくる、クラシックを中心に据え、姉妹の連弾やジャズも弾ける人ということで、若手女性ピアニスト3名にお願いすることにした。もう秋も終わりに近づいていた。

出演者を交えての初打ち合わせ

12月、出演者を集めて顔合わせを兼ねて初めての打ち合わせを行った。ピアニストもベルリン留学中の1名を除いた2人に参加してもらった。

大塚茜さんは楽器メーカーのデモンストレーションをしていたこともあってか、常に笑顔で次々とアイディアを出してくれ、議論を引っ張っていってくれた。我々としても頼もしい限りである。もうひとり、木村ゆうさんは、札幌で活躍中のジャズピアニスト。本番前には必ずおにぎりを食べるという（プロフィールにも記載されている）。見た目や話し方はおっとりとした学生にしか見えないのだが、後にそのイメージは完全に打ち崩されることになる。

宮下奈都さんと川岸支部長との対談

曲の分担を決めコンサートの進行台本も決まってきた。ピアニストの個性も垣間見られ楽しい夜であった。

チケット販売順調！…順調すぎ!?

1月末にはフライヤー、チケットを会員に送る。我々の44コンサートでは会員による手売りを主としている。

フライヤーの作成は事業参与の沼山良明さんにお願いした。沼山さんは長く事業部を率いてきた大先輩でありSIAF札幌国際芸術祭エグゼクティヴアドヴァイザーを務めた多才の人だ。今回も深い緑色を基調とし、宮下さんの写真を配してセンスよく仕上げてもらった。

売券は去年を上回るペースで順調に進んでいった。ところが、コンサートまで2週間と迫ったとき不測の事態が起きた。チケットの販売数が席数を上回ってしまったのだ。週毎に集計していたのだ

が、実売よりも報告が少なく、この数日でのプレイガイドでの伸びも一因だった。

すぐに売券をストップし対策を考えた。関係者にはご遠慮いただき、当日もオーバーしてしまったときのことを想定して、返金、ホワイエにモニター席や、宮下さんのサイン本などをお詫びにお渡しする準備をした。この不安を抱えて当日に臨むことになった。

いよいよ当日

当日は調律を担う川岸秀樹支部長に続いて入館した。川岸さんには第1部で宮下さんとの対談相手になってもらい、ピアノ調律もお願いした。もちろん支部長として全体を統括する立場もあり、「そんなに働かせるのか？」と苦笑いされたが…。

あっという間に時間は過ぎていく。リハーサルも始まり、裏では準備が着々と進んでいく。

開場1時間前に宮下奈都さんが到着。笑顔が素敵で柔らかな印象だった。挨拶もそこそこに早速リハに入ってもらう。位置や質問事項を確認してスムーズにリハは終わった。

が、宮下さんはここで2本のメディア取材。6月の映画公開を控えそのための取材だった。宮下さんは開演まで息をつくひまもない。

満席御礼

ステージ袖のモニターには、入口前に並ぶ長蛇の列が写る。期待と不安が混じりながらいよいよ開場。どんどん埋まっていくホール…あっという間に満席近くになる。そして開演。

とても緊張されているという宮下さん。そんな風には見えない。お住まいになっていたトムラウシの自然と音楽から小説を着想されたお話。穏やかで優しい語り口に自然と客席も引き込まれているようだった。途中から川岸支部長も登場しての対談。川岸さんの「コンサートの仕事は陽のあたらない黒子、家庭での仕事はお客さんとコミュニケーションが取れる陽の当たる仕事」、宮下さんの「調律師さんは誠実な真摯な言葉遣いをされる方が多い」との言葉に襟を正す思いである。…と思いながら、モニター越しにあと何席、何人来たなどと言っている間に第1部は終わってしまった。

宮下さんのお話が終わると帰られる方もいらっしゃるかなと思っていたがそんなことはなかった。473名。補助

席も出して完全なる満席である。

ドラマチックな演奏と朗読

そんな中で第2部は始まった。暗闇から登場したのは ピアニスト、木村ゆうさん。

トムラウシ～かつて宮下さんもお住まいだった～をイメージし、川岸から受け継いだ音を紡いでいく即興演奏。

熱量の高いパフォーマンスが終わった。しかし拍手がない…。しばらくの間の後、朗読の本田夏子さんの声が聞こえ、小説の一説が朗読される。これが交互に展開されていく。あとでわかったことだが、照明のせいもあって観客もどこで拍手をしたらいいかわからなかったようだ。

この後、木村ゆうさんはシベリウスやショパンの「子犬のワルツ」を即興でジャズにしていく。その熱く激しい演奏に度肝を抜かれたのは私だけではないと思う。

そのあと登場した大塚茜さんの奏でる音は、深い祈りのようだった。バッハとシューベルトの「アヴェマリア」。シューベルトは私がリクエストしたものでもあり安らかで美しい瞬間だった。

そして、最後の1人は木村友梨香さん。2015年ショパン国際ピアノコンクールの本大会に出場。現在はベルリンへ留学中であったが、このために帰国していただいた。

木村友梨香さんにはショパンのエチュードやベートーヴェン「月光」を弾いてもらった。高いテクニックに裏打ちされた表現力、圧巻だったのは後半の月光ソナタだったろう。最後の音の響きが消えた瞬間、このコンサートではじめての拍手が来た。この瞬間ふっと力が抜けた。あとに続いた演奏は皆拍手喝采。

こうして、アンコールを含め無事終演を迎えることができた。最初誰にも見えていなかったものが、たくさんの人々（ここに触れなかった人々）のアイディアや惜しみない尽力によって形にできた結果だと思う。改めて、関わっていただいた全ての方々に感謝申し上げたい。

ファンの皆さんに丁寧に応対される宮下さん

浜松から世界へ

中田 吉彦
（日本ピアノ調律師協会会員／静岡支部）

4月4日は何の日？

4月4日は何の日かご存じでしょうか？

「今日は何の日？」でネット検索すると結構いろいろと出てきます。"あんぱんの日"、"どらやきの日"、"みたらしだんごの日"、"フォーの日"、"猪肉の日"と食べ物にちなんだものだけでもこんなにあり、他に"沖縄県誕生の日"、"ヨーヨーの日"、"四輪駆動の日"、"オカマの日"などなど、聞けばなんとなくゴロで理解できそうなものから、まったく解らないものまで予想以上に出てきました。で、ここでご紹介したいのは"ピアノ調律の日"です。英語の4月＝Aprilの頭文字Aが、調律をするときの基準音"A＝ラの音"と同じで、そのAの周波数が440ヘル

ツであることから、4月4日を〝ピアノ調律の日〟に制定しました。

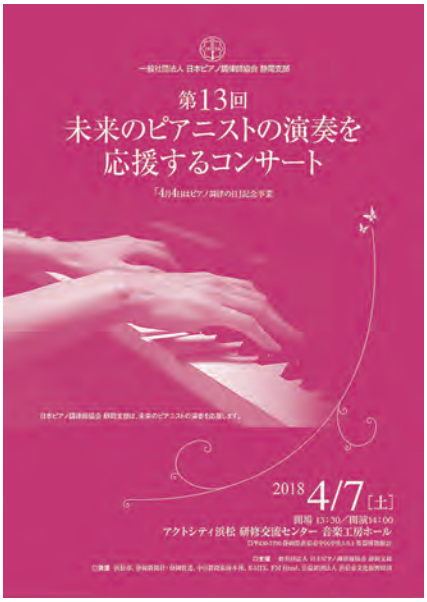
私たち日本ピアノ調律師協会は、この〝ピアノ調律の日〟を1年の中でも大切な日のひとつとし、毎年4月に全国各支部の主催によるコンサートや記念事業を行いPR活動に努めています。この日にちなんだ当協会静岡支部の活動を少しご紹介します。

浜松で「未来のピアニストの演奏を応援するコンサート」

我々静岡県在住の会員も、この主旨に賛同し、毎年4月初旬に浜松市で「未来のピアニストの演奏を応援するコンサート」と題した事業を企画開催しています。

今春で13回目を迎えたこのコンサートは、当支部の会員が、日頃から定期的に調律にお伺いしているお客様の中からピアノを学んでいる学生さんを推薦し、出演いただくコンサートです。アドバイザーとして初回よりお招きしている浜松市出身のピアニスト、仲道祐子先生には、コンサート終了後に出演者ひとり一人に対し演奏講評をいただいています。出演された学生さんには、演奏機会の場の提供とトップピアニストの指導による演奏技術や表現力の向上を、我々支部会員においては、当協会への帰属意識の高揚と会員間のコミュニケーション醸成を、そして、音楽のまちづくりを目指している浜松市の地域振興事業への寄与、この三つを主眼として、2005年から毎年開催しています。

今では、複数年に渡って出演希望される学生さんもおられ、第10回の記念コンサートには仲道祐子先生の演奏も折り込むなど、会員内外では定着した事業となっています。初回開催に至るまでの議事録を拝見すると、それまでの先輩方のご苦労を垣間見ることが出来ます。このコンサートの立ち上げには初回開催から遡ること5年前の2000年から議論が積み重ねられていて、当初はピアノ調律師仲間が主催するコンサートの意義や、当時の景気を背景とした収支問題、浜松市という地域特性などから、反対意見が7割もありました。その後も企画案の練り直しが幾度も繰り返されて、初回開催の終了後には「このような形態のコンサートは初めてですが、ぜひ続けてほしいですね」と仲道先生からの談話が残されていて、まさにその言葉を受け継ぎ、現在も実践し続けています。



世界へ向けて熱く音楽を発信

今年の11月は、ここ浜松市で「第10回浜松国際ピアノコンクール」が開催されます。浜松市が1991年に、楽器と音楽のまちとしての歴史と伝統を誇るにふさわしい国際的文化事業としてスタートし、以後3年毎に開催しています。

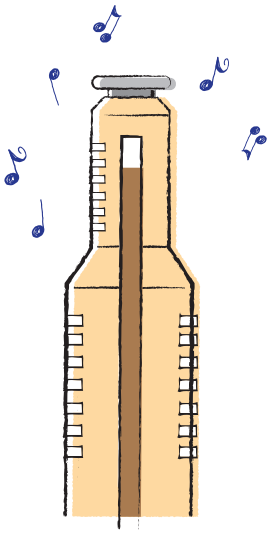
回を重ねるごとに演奏レベルも高くなり、入賞者のみならず出場された演奏者は現在世界中で活躍されている、とても質の高いピアノコンクールです。また日本のピアノメーカーのお膝元でもあり、とても良いコンディションのピアノが用意されています。

このコンクールには3つの大きな目的があります。ひとつは世界を目指している多くの若いピアニストに対して、日頃の研鑽の成果を披露する場の提供と彼らの育成、二つめは世界の音楽文化の振興、そして三つめは国際交流の推進です。（第9回プログラムより）

我々が行っているコンサート事業は、このコンクールには規模も内容もはるか足元に及びませんが、考えや気持ちだけは肩を並べられるかなと自負しています。

浜松市のある静岡県西部地域は、楽器産業の背景からもわかるように、ピアノ調律師の人口密度が異常に高い地域です。おそらく全国、いや世界中でも一番高いと思います。ピアノのコンサートに行けば必ず誰かに会いますし、休みの日の大型ショッピングモールも危ないです。でも、ピアノ調律の工具や部品を扱うお店が並ぶのも浜松ならではですし、楽器博物館のピアノ展示の充実ぶりも圧巻です。

来年5月には、世界中のピアノ調律師が集う大会を20年ぶりに日本で行い、世界に情報を発信していきます。開催地は当然なから浜松です。浜松自慢はまだまだ尽きませんが、10月下旬に行われる「Ｔｈｅ 27ｔｈハママツ・ジャズ・ウィーク」、そして11月に行われる「第10回浜松国際ピアノコンクール」など、この秋も熱く世界に向け音楽を発信し続ける浜松へぜひお越しいただき、楽器を、そして音楽をお楽しみください。



2019年 IAPBT 浜松大会
Piano Piano Piano

参加者募集

日時：2019年5月25日(土)・26日(日)
場所：静岡県浜松市 アクトシティ浜松

◎IAPBTとは？→ピアノ技術者の世界組織です。

IAPBT（International Association of Piano Builders and Technicians／国際ピアノ製造技師調律師協会）は、1979年7月アメリカのミネアポリスで日本ピアノ調律師協会（JPTA）とアメリカ調律師協会（PTG）の共同提案により設立されたピアノ技術者の世界組織です。現在はアメリカ、日本、ヨーロッパ、韓国、台湾、オーストラリア、中国、南アフリカの組織が加盟しており、2年毎に世界各国で大会を開催。技術情報の交流や音楽文化の興隆に努めています。日本では、1983年に東京、1989年に京都、1999年に浜松にて開催。来年の第21回大会は浜松で2度目の開催となります。

◎2019浜松大会のテーマは、「Piano Piano Piano」ピアノに関わる方はどなたでもWelcomeです！

ピアノ調律師とピアノに関わるすべての人（=弾く人、聴く人、学ぶ人、教える人、造る人、売る人、運ぶ人、直す人、etc.）のための世界大会。つまり、ピアノにつながる方ならどなたでも興味深く、楽しんでいただける世界大会です。

◎実施イベント内容

- 展示ブース出展……協会支部他　25社予定
- テクニカルセミナー……8社予定
- コンサート……両日に渡り計画
- 物産展
- 参加者……国内・海外500名を予定

詳しい内容は、日本ピアノ調律師協会HPにて随時お知らせしてまいります。

日本ピアノ調律師協会　http://www.jpta.org/

◎参加登録料 お得な早割がございます！

セミナー・展示ブース・コンサートのフリーパス代金
（パーティ代は別途、料金単位：円）

	早割（12/1～3/15）	当日他（3/16～当日）
協会員	20,000	25,000
プレミアムビジター	25,000	30,000
一般	30,000	35,000
学生	5,000	5,000

申し込み・問い合わせ先：（一社）日本ピアノ調律師協会　☎03-3255-3897　03-3255-9246

♪お気軽にお問い合わせください♪

音の扉 創刊号 平成 30 年 11 月 15 日発行

編集・発行 一般社団法人 日本ピアノ調律師協会
〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-21 楽器会館5階
TEL.03–3255–3897 FAX.03–3255–9246 E-mail. info@jpta.org

誌面の問い合わせは発行元へ

表紙 絵／十二所秀正 題字／三浦幾代

制作・デザイン 株式会社 按可社

編集後記

日本ピアノ調律師協会では発足以来、会員向けに会報を発行して参りましたが、「音の扉」は広く音楽を愛好する皆様に向けて刊行致しました。日頃は黒子である調律師から見た音についての体験や考え方を本誌で紹介しながら、今後読者の皆様と共に歩んでいきたく存じます。折しも浜松市に於いて第10回浜松国際ピアノコンクールが開催されております。このコンクールは、ピアノメーカーにとっては車レースで言えばＦ１（エフワン）に値する存在。一人でも多くの参加者に弾いて頂こうと、日頃から改善を積み上げています。その集大成がステージに上がるピアノです。メーカーの考え方や取組姿勢が垣間見えるかもしれません。

今年は自然災害の恐ろしさをいやというほど見せつけられました。私たちが扱うピアノで少しでも心が安らげば幸と存じます。

最後に本誌に対してご意見、今後取り上げて欲しい内容が御座いましたら上記発行元まで「音の扉」と記入の上お寄せ下さい。

（広報局　大嶽壽宏）

http://www.jpta.org/